



倭訓栢前編二十八

洞津 谷川士清 築

保の部

火をやくよひの通音ナリ或ハ唐音ナリムテトモト古書多くやとま  
きく自語ナム一〇穗ハ火より轉せり穗乃出初の色皆赤一 稲穗と本  
ノヘ貫之集ヨ田オリハ家ハ河内所ヒスカシウ神代紀ヨ類トナムも同  
江次第ニ薦本謂之稻切穗謂之類本類國司貯積之惣名也ヒスカシウ〇鎗  
鋒とかくとも穗乃名ナム一〇秀字どナムハ浪秀と神武紀ヨナム  
かくとも應神紀ヨ國乃ケルモノスセトアシカシウ穗ヒキ通テリ西土ヨモ秀出  
之穗カクシスカシウ〇最字どナムも秀と矣通フ〇太字どナムも秀ヒ及  
カク穴太乃類ナク古事記ヨ三穗ヒ御太ヒ字モ同一〇百字どナムハ五音  
八音ノ類ナクルヒトホト同韵ナレハリヒト約めサム詞ナム一〇帆ヒ穗ナリ  
轉せぬマヤ遠くナリシハヨヌシハ意ナム一〇凡く帆ヒナム事ヒ  
帆ナモ纏ナモナセカラズ又羽ヒ通フナリ字彙掉船羽也ヒアヌ

○南京福建船乃帆の竹乃ろ北國とすと船も此と放ふと  
モ○そほへ箬蓬也木綿々縫布也童蒙頸韻よ雙もよもく○帆山の越  
前より○三河郡名寶飯かくとまく飯飯よ作るへ誤たり○古書上保寶裏  
報袍方くとは乃假名よ用う

△はあ

△ほい　當時布衣乃よくせなうあらひともアキラ名教より、ミカニト訓  
久裁縫とくよりひま事れ一院中は布衣始とテハ御謙位乃後  
上皇初く御狩衣着御乃規式びらつ唯上下級分すくもく今ハ青侍のと  
る岱布衣乃音と呼かぬ一○源氏エアシム本意乃哉シテ本意乃字  
漢獻帝紀ニモ○馬を追乃俗語よりハモル乃轉かむ一

△ほくみ　笠笠工門立藏開酒開穗海シテシテ

△ほく一　今婦人乃首服ヨリ一帽子乃音ナリ西土乃書ノ面帽ふくもスス  
帽巾乃類ナリ今種ノの製法とも實ハガズミ乃省略するア江戸乃婦女レ  
ノキシ角シテ黒毛絹シテ頭面と包ムクハ其後ハ綿シテ制リ頭面

△覆ひ一　宝永乃比ナリ風俗ありとて今ハ明ヒテ蓋額の  
類ナリ一北國ノ頭巾とぼく一とく唐式ノ庶人帽子皆寛大露面不得有檍蔽  
く又ゆ今乃清人ノ帽子ハ頂ヨ紅毛系と髮筋もかけ夏毛毛乃ぼくもとの代ア  
モ○今昔物語ノ錦乃帽子モハ男ノモアセテ前ケシテ編ノ物と前ヨカクナリ又大  
飼ハボク一と松皮ぼく一とくかくもテ○つ毛草乃移シボク一とく即藍  
紙ナリモテつ毛草と尾張ヨボク一花くも

△ほく一　日本紀ノ僧と云う法師ノ音ナリモテ一かると書來モテ僧モ  
梵語翻一和合ノモ無諱ノモアボク一とよむキ和訓ノ意ナリモキ忌  
詞乃僧称髮長と儀式帳ノ法師と書り大法師侍法師承仕法師中間法師  
ナリアヌモ建武年中行事ノ大法師法おや法一と書り○乃法師鎌倉  
右大臣集ニスモテ○法師律師ノ号ハヨリ道士ナリ出ゆ浮屠乃称リ非す  
とも

△ほく一　律の僧ノ謀反謂謀危國家と云えテ○今ノ謀判とちう判ハ判

形の印 章が指す甚其罪が重いとするが爲よ從ふのゝく謀反より轉訛  
せる成る。○謀反と謀叛と同一かは大逆と悪逆とも亦異也

せら威<sup>一</sup>○謀反と謀叛<sup>二</sup>と同<sup>三</sup>かく大逆と惡逆<sup>四</sup>と亦異也

布袴のすみくせくやく反ふ也西宮記より布袴舊制上下著之近年諸宮人  
著之とアソムリ桃花菜葉よ常袍よ着下襲指貫是と布袴とよもと飾枚又  
とのいきよりくよもうづけゝるハ布袴と催束帶ととりふ也と云々トク古ハ  
布以用わる威一〇直衣布袴ハ直衣よ下襲指貫著するといふ也  
法師のうませくる子がひつ日本後紀より官符應紀正僧子假薩出身とも  
○朝鮮國より父母の喪故重んと偶また喪中よ子あへ産くる事あきら其子がと  
て僧より人倫よ非る意を示もとめう

北條とよより伊豆國也○北條家ハ侍臣として天下の權ハ恣よせりも  
亦百年の間九代よ及づる義時代より上皇ハ隱岐に遷セりより天子ハ廢立ト奉  
モ大臣ハ進退する事其家によく天下の人朝廷ある事ハ知るよ至りまし  
其子恭時賢ナリて人心ハ得恭時の孫時頼形を変へ僧とからうて治城求め時頼  
の孫貞時を祖父ハ慕尚して國々ハ巡る三年ナリて還る其子高時不徳ナリて

云ひぬ○北條安房守氏長ハ武田家内侍を小幡景憲ニ得て和漢文武之事理  
ニ精通ト加之紅毛國の戦法火術ハ其蘊以究む  
我邦古より封建也よそ尊卑不相凌歛無犯禮節農末工商遊手の徒於  
文武官士兵卒対捍セモ拜趨狀尽モ設不遜失禮の者ありハ其人忽戮之而死  
殺人之咎本朝之國律也

わちよ 庭訓より侍所の奉書と云ひ室町家の時より上意以て奉行より出も  
文旨次奉旨としよ○紙よ大奉旨小奉書もともとも見えよ据也

ほくろみそ  
出納家よ法論みそ乃公事としよ幸あら譲命僧正法論ノ時も  
造ゆとひ一說よ奥福寺維摩會比講師小水乃為よ座と退く事成らじ  
ひく是が造りて食ひ一うちれ名かうもく花鏡と舉子乃延試よ銀  
杏と煮て食ひよく小水と截とひ是も座と退く事と憇くとくたる職

人歌合

ノ

うくのいわくの都のやううそをうくみうる御へおれと

ほえ 近はうそて柴乃細きとらう北國へんじ柴乃ようう〇押餅家

木乃葉乃赤くらばく火枝乃青かう

ほど 茄花物語よ御風よてかく見一てほばれとアレモとくまふハ

蒲黄よや

ほ 外とすも〇ほくくほうづくれとく俗語ハ火香かな

ほひ 日本紀よ寿とすもかし反さかう祝とほきとすもと同ー延喜式

よ祭とすも

ほけ 田舎よ門戸又へ倉乃戸たとよ稻のかううりよ穗を懸く神よ奉ゆ

かうとくす籠蓋よも五穀取初穗掛とくそすも澄源うう

もくうけえせ登けのつまうとほけどすもくうくとく

又稻ばかりて後物よかけてやとす今も同ーすく古今集よも秋乃田乃

稻てふてもかけかくよくすく頭注よて柳よくかく物かれよとねり

ほく 朗字とよあう日本紀よ詔如靈異記よ廊ともよあう古今集よもくめ

乃ほくと明行よくと名義集よ益威囉迎此翻火星とくえととと梵

詔かくー〇説よほくと口とくくとくふもせよ据く俗語かう

ほく 倭名鏡よ乞索兒靈異記よ乞とすも乞弓乃ま人の心とくく

被ひく物とくとくくかく名つけるかうがい反さかう

ほく 源氏よ世よもほくたむとくとちうとくのほけとくとくとく詞かう

とく〇口詔よほくと折るかくよ其聲よや

ほく 古書よ禱字祈字賀字壽字とすもほくとく

足筑紫人へよもとくひ因幡ふくとくやげとく也西行被り

トくせんかくまちほくとく尋ね入てをえーはとくもくも

かく 古事記よ本岐歟之序歟也とくやかぎハ祝の肴とて旋頭歌半歟也

かく 祝詞式よ獻横刀時鬼とく神祇令よ凡六月十二月晦日大祓東西文部

上祓刀讀祓詞謂文部漢音所讀者也とくや〇鬼祓祓詞とくと令同一又神

祖令少中臣宣枝詞ト部為解除トアリテハ即六月枝以枝詞トシテ也解除ハ  
モノハシモ也

後句を連繋かへらす○蝦夷もそまとも辞ある

新撰字鏡より燐とよもや火糞乃く新千載集より况のほくそ  
アスムテ今ほくらとく火口をうつ火打よへり一火引とくとくやいちぶ  
よくらう〇黒子と俗よほくまとくよほくろよもよう老人乃きよほ

くそづくくらひあゝ矣のキとほくそ矣とくらふ是なり北叟乃故事と引  
行へ  
ほくろ 古今栄雅抄よ長能、記と引く春の林乃東風よ動き秋乃虫乃か  
露よ鳴とるえとく高砂乃謡よもこの詰あり北露の辞らむづ  
ほぐり 火串をりくとく松と夾む木をりくとく和若鉢ヨ火瓶シよ  
やう烽よこう

△ほけ 源氏よほけヨホケをとくらすを任アサシたる意タフトコアヌほけヨホケト  
もええヨエエトヨウ○源氏よヨれとも不ハほけてヨウトヨウノモアヨウニユホホケホ

ほこ 戈矛とひよ又槍消戦鉾鉾ふと同一穗木にて木ととて不くほふ  
又火薬の矢三角へ火氣乃炎上と象るるからニ三代實錄よ鎌槍轄  
尾槍延喜式よ花槍たゞと見え日本紀よ長槍ありて異朝よも近世すう長槍  
もアラム又平鉾三股鉾たゞとし物も見えり新撰字鏡よ銭とみれほこと  
訓ひ典略よ雙枝為戦草枝為戈ともアリ○熱氣とほこくとくも火香乃

轉せむなるべし又ほこはくすくも

ほくら 日本紀ニ神庫とほくらとすく倭名鉄ノ寶倉ともすく今モ專叢祠とくすくほへ秀の高きをくすく叢祠ハ草木學樹之社也くらや

ほくら 埃とくすく火凝の美をくすく死塵とくすくすく○算よほくらとくすく奇零たり或ハ時時もくすく○土ほくらも難すく

ほくら 斎とくすく又伐も同一秀起乃名うや物よほくらとくすく吉今集

ほくら 菅家万葉よ綻字とくすく字ハ衣服とくすく主とすく源氏よく新撰字鏡よ誇とくすくほくらとくすく○大神宮乃御饌よ供奉ひ稻を作田所乃御田道乃果よハ田長の人奔詣ひ鼓吹レ送くもて行誇すくすく皆ほくらびて矣ぬとあれて訓ハ煩轉乃名ロと開く乃意する恨みのほくらすくも同一歎冬誤綻暮春風の類の花のほくらぶくすくふくらむくすくすく同ー新撰字鏡よハ從よ作くとすく又紓ともよくすく俗よふくらむくすくすく又破綻くすく

ほこゆげ 日本紀ニ弄槍とくすく古事記よも予ゆげとえくすく予ゆげ

の義をくすく倭名抄よほこくとくとく續紀よ持槍よ作る樂の名か

ニ宋朝の樂よ今絶たり令義解よ槍ハ木の両頭銳ミ者即戈乃属ナリ

とえくすく

ほこやう 俗語ナリほこらとくすく轉くすく語ナハ一母づくもくすく  
△ほく 對馬と巫魂の類の称よくすく祝の不をく一撫拂ハくすく古の撫物

ナリト一違事くすく古乃方違ナキハ一往昔對馬よ天童くすく行く

今十家よ及くほく是ナリくすく

ほく 神代紀よ祝字とくすく火裂乃心火乃裂出くすくすく○俗よ情と

墮くすくとくすくほくとくすく同家ナム

不まち 源氏よくすく菩薩也集解よ菩薩ハ梵音具云菩提薩埵摩訶薩埵舊翻大

道心衆生新譯乃云覺有情くすく井ハ菩薩と同一さくやくくすくすく

神社よ称よくすく式よハ幡大菩薩宇佐宮大洗磯前薬師菩薩明神社酒列磯

前藥師菩薩神社よくすく早佐宮ハ應神天皇也大洗磯前の事ハ文德實錄

齊衡年中ニアリテ○倭名鉄曲調類ニ菩薩トアリ或譜ニ云僧正婆羅門等并哲師等所傳也トアリ百川学海可詰樂譜ニ菩薩蠻あり○衍基菩薩ト呼ハ寂後ニ聖武帝の賜一也トアリハ非也類衆國史ニ時人号曰行基菩薩トアリハ勃賜ミハ勿シ後伏見帝の時ニ賜西大寺僧敏尊号興正菩薩是始也○俗ニ菜穀を菩薩トアリ遠江天龍川の上ニテハ事ト称ミ雞林類叟ニ白米曰漠菩薩粟曰田菩薩トアリ白を漠トアリトアリ韓國の方言也トアリ○菩薩石ハ嘉州峨眉山ニ有リ諸名ニアリ本邦ニテ太和國友田ト出又對馬の六方石と同種也又能登國鳳至郡菩薩谷の菩薩石ハ色黃僧形アリ長一寸也トアリ

△ほー 星トアリ火石ナムトアリ神代紀ニ天安河所在五百箇盤石トアリ星トアリ河乃星象トアリ神功紀ニ河石屏ニ星トアリハ無事の譬レテ石ノ星トの子細タリテ史記註ニ星石也トアリ○古星臺天武紀ニアリ船來乃品ニ五星後アリ又星トアリハ墨ヨグリトアリソルトアリ○星ニ形ニ造ニ事ニ道家佛家ニ意ナリ近ミハ紅毛人と曰アリ○竿のままで星アリトアリ喻ハ元門関ヨ

押棒折月トアリトアリ○神樂歌の名トアリトアリ○欲の意をアリハ玉葉集ニ色アリトアリ沙ノ葉ハ雲の上ニアリトアリトアリソルトアリ  
○えまやー(ひもやー)ふとへんすくいしにすくわー(ひもやー)ハ欲の意也○かー(ひもやー)木ハ美濃ノ山中ニアリ葉をふくよ似て花四月比ニ開く白一形鉄線の如ニ實赤く拇指頭の大ニ食カーニ○ほー野ハ三河國の邑名ナリ又肥前ニモ河ノ星岡ハ伊豫久米郡ナリ土居得能北條と戰シ所也○星崎ニ浦星乃社ハ尾州ニアリ昔ニ此ニ星落トアリ  
ほー 神代紀ニ欲字又欲得トアリ又かくくけニテ新撰字鏡ニ新撰字鏡  
ト訓セリ

ほー 和名鉄よ肺とトアリ乾肉ト注セリ今ニ脯とトアリ新撰字鏡ニ肺を  
トアリ延喜式ニ肺魚トモアリ

ほー 鯛鰐と乾く糞培ト守甚臭トアリ乾臭ト名ナリトアリ  
ほー(イシニヒコ) 倭名鉄よ脯とトアリ糗も同一ホー(イシニヒコ)新撰字鏡ニ餌と

儒學叢書  
卷之二十一

卷之三

十一

字書よ乾飯ナリテスル侍中群要よ已刻供朝干飯事トスル也  
襄抄よ歎とよムテ乾飯脅シテスルトキホレシムの粉ナムトシム  
正字通よタムニ粉ノ類ナリ○庭訓よ糒袋アモ兵糧ナリ

ほりゆく 星合とかけり星合乃空もセタモリハ星合の濱へ伊勢一志郡より  
今其里よたなきと乃社存す鶴乃橋も残きり丈木集よ

今其里よたなづく乃社存す鶴乃橋も残り木集よ

○星川ハ負辨郡ニモリ ○式よ星川神社スル光俊の歎ト  
明ヌムト室さうり行星川よかうりけやえくももく

鴨長明  
寺事

星祭ハ関東評定博士入山眞言家尊星王法ありて當年星と  
て七曜のうちよ其年ノあらうたる星とあらう朝野群載ノ尊星供告  
文あり○周防乃吉敷郡高原氷上山ハ多多良家より千餘年毎年二月十三日  
よ北辰尊星とすり所なり○星祭嶽ハ美作なる  
ほくほくまく　総逸放修乃類とすり往々神代紀工擅とよも新撰

字鏡入妓とほくきまくくよみく○従ヒ縦ヨ同

日本紀より賣嗜マリセと書てほりせむ。其略記  
をもつて今欲マリセ乃意をうち又褒匿マシニカル乃不もや也と志をすめとよひへ日本紀より之

ほーとさなく年  
年中行事歌合四方拜よアミタノリ元且よ天子もか星乃  
名とくをくせたまつとらふぢう

葉集より涼もすみう

△やせ  
哉前よ柴をらう○木の小枝あるをやせびとくらむか関西の語也

俗よかほせりくらゆるの痛乃氣をう

和名抄云脣脣比之倍云東坡曰人之在母胎也母呼亦呼吸亦及口鼻皆閉而以脣達故脣者生之根也○瓜蒂とほそくいも系同一事李乃類

よ處どくふ事少雅と出と訓同一○倭名鉄よりそと○工匠乃ほぞくと  
のハ荀とも直荀ともスミほぞつと荀相接と射史と出と帝と似と云ふ  
をう今ハほづと云う○男とほぞつと女とくのくの男根とほぞくと  
あうと埃及枝よりそと

ほそー 細とよもろ○和名抄より白央と訓せ細繩ススメリ不する○新撰字鏡  
この辭とすみうほそちと同義とや

ほそり 倭名鉄より變とよもう切韻より逆燒ムカシナリトアスモラウ又燔ホソキと  
防野火也と云えくほそへ大さうけハ消え反けたり或へ火退ホソキナリトアス

童蒙頌韻と根とほそくよも

ほそいと 脅帶スサニとすく神代紀より脅とよもく○脅帶と断と續スルと繕  
とくよもうて反語と云て祝と云う○紫式部日記より御ほそとのかハ殿  
乃と待と式正の事らるゝ三議一統ミツギイチウとも大御所入御スルてつまな  
ひーと見えく

やうく 細川の里へ塔の岑タケと飛鳥岡スカイとの方へありすて万葉集ミツマタと多武の峯

と細川ススメと合せう又南ミナミ湖の細川山ススメとよもく○細川家へ頼春の曾祖  
義季三河の細川より居スルすう氏シテ頼之の執事スルや義詮終スルと臨スル頼之と一子  
次卿スルと遣スル幸ラカと輔スルとく義滿ミツマタと父シテは汝スルよく謹スル其教スルと違スル  
事スルとくとく建德二年補正儀スルと義滿ミツマタとをとく河内シテと還スル吉野ヨシノ國  
らうめ頼之の子頼元ミツマタと正儀ミツマタを援スルむ南北合体ミツマタ神ミツマタの志スルと復スルととくよ本くと  
く○玄旨ミツマタ源藤孝朝ミツマタ臣也征夷大將軍源義晴公の四男母ミツマタ遷翠軒義賢の女倭  
歌ミツマタ圓智院公國ミツマタ卿ミツマタより古ミツマタ今ミツマタ傳授の正統ミツマタを得スルり石田三成ミツマタ山乱ミツマタの時倭歌ミツマタの口  
訣スル公家ミツマタと奉スルく

古と今とかつてね世の中に心の種ミツマタとのとある言ひ承

義賢の女後ミツマタ三閨伊賀守ミツマタと嫁スルり時藤孝ミツマタと供スルて三閨の繼子ミツマタとあき  
泉刑岸ミツマタ和田の城守細川右馬頭ミツマタ元常養スルて嗣スル家承繼スルむ始スル前將軍義  
昭公ミツマタ補佐スル後ミツマタ信長公ミツマタと侍スル豊太閤ミツマタと属スル又神君ミツマタと從スル武功ミツマタのく  
みミツマタのく非す倭歌ミツマタの道ミツマタと達スル玉ミツマタ

ほそちが 三代實錄ミツマタ細長綿ミツマタと宇治拾遺ミツマタ女乃裳東ミツマタ副ミツマタとたう

儀言 卷之二十九

九

おは紅ハ打たる細長くらゝ弄花よ幼き上鷹乃うよくる物ナラシ  
えく雅亮抄よ鳥子かまのわそ長ズシテ女官節抄よ皇太子  
童乃時よ召セテヨキ幸又女房装束抄よ用細長之時不用粗袴等  
是先例也とく

やそとの 索麵の内裡詞うるゝ海人藻芥よススム

やそうち 常の螺鈿蒔繪の紋皆細太刀り、儀刀也とく

ほそくづ 倭名鉄よ婦どより火脣乃キナリ〇篤信乃説よ偏鄙乃  
人腰よ帶る火持囊と宝藏くらふ宝藏鰐も其口囊の口と持るゝ  
名くくらふ姓ほく岱宝藏と訛ナリ

ほそづの 倭名鉄よ廊と訓セテ細殿と江次第よ書セテ延喜式よ夾舍と訓

セテ

ほそとこと 细男かるゝ一束花物語よ御靈會乃ほそ男乃手拭てかほり  
たるうちとぞえく山城離宮八幡よ木偶人乃ほそ男と名く物わう春

日若宮乃細男と同く

セテ

ほそぢかく 儀式帳よ細稅も大税延喜式よ小稅し書は是ナラ大稅よ  
クくつ以一把為東とく

ほそぢかく 陳とぞり楚辭朱注よ挾而長也とく

やそくち よ源氏よ足少樂の名也倭名抄よ保曾路久勢利とくそくニ曲

也やそくち階史會要よとよく跡勒うや國の名成一ノ勢利區別ウ  
く記サキよ上合せくやそくせうと唱來生と

ほそ 材木のよきよくすく指拙くらゝ威摯紀業よ鐵除夜燒骨融くらゝ  
も同一とく山里よとゆうよくて木とく火立の矣れり歌うも山  
がつねなまくらふほくの火ナよすく尾張出雲よまくかぶ伊勢よ根  
こド安房よ林つゝ慈州よ木下武藏よ林つゝ又根木よよまく沈のほくほく  
ぐひかくらゝ新撰字鏡よ燼又燐燐々とよく火立耘う者する金一〇ほ  
うくらふ口語もほくより出たがるほくらもん〇八嶺大原乃里(同  
姓婚姻)と他郷よ求めんじく其意とよかどく

親の親子の子の子また山嶺のやくの火けとく

異方は朱陳村と同一。其始り亂と避へよう朝鮮も亦似て阿波乃祖  
谷よ安徳天皇乃陵あり紀州熊野乃山中よ小松家あり周防國よ畜生  
所あり大和吉野乃奥よ前鬼後鬼あり是も亦同一常陸國真壁郡よハ叔父姪  
夫婦とナフハシの多一是と逆縁とも云ふ。○伊勢乃俗よつゝとほく

羈絆とよもり新撰字鏡と馬と頬とそしにほど一とよもり  
絆馬前足とアラマリ李徳紀乃御歌よな木フナシタリテ小木  
と足よやしつけて足ガサムとアラマリ萬葉集ヨシフニシタリふも及ヤ  
まうほくアレタミハア今ハ足懸子や釋名ヨ絆半也物半行使不得自縱  
セヒスモ○妻を帶子ふと俗よほくよかひふと古今集ヨサリス人と  
そほど一アラマリ伊勢物語ヨサ男ヨホクシルヒテス徒然草ヨサセ乃ほ  
ノモヒメ方よとスモ宝積經ヨ妻と羈絆と説アリといふ○新撰字  
鏡ヨ鍊とほくとよもり同一訓矣ナリ

ほくか 螢と訓せり火始ホタル乃云ナガラホ雅ニ螢火卽焰と云々新撰字鏡上鱗

毛訓ぢう土ほくるへ燐耀ぢうえとよはけほとひふ古歌よ  
集先づくすれわくの光りそむひくと外がくもふ  
○豈と宇治よどみふくと又乃とすとて今宇治瀬田乃邊よ多く集りく圍アリ  
水ミ中よ入るやかと俗よ合戦アリハシいなぐせり○堀川百首よ  
よちてくと草せ豈とけつもてもとをよみすが身つま

是れ昔書車胤の故事なり○秋風らしく行はる哉とひづりて文集より螢火乱飛秋已近  
といつるよよりうる○螢火と云て女とて見ゆキ伊勢物語うつほ物語源氏常  
卷よりえりえり○貝よほくるとくぬへ其形状乃似くるニ品あり花肆よよぬまのへ  
紫背龍芽ナリモウ草ともいふ又蔓生乃名と同しくする物あり皆花とみて  
名くあたる

ほくまく  
海藻をすり穂俵ヒツヂ乃食更乃浮乃如き物モノ多かつてと名く古エシマロの  
なまくともなまくとも春盤ハナヘン用ひ穂俵と祝するをす下品シモモノとせざとがまと

ほちく  
鳴桐暁筆嵐の歌よ物とほちくをすよくもよくも

ほつす 各よて欲字とよりほつす乃轉せんす○要を欲と訓と本

東北注よりえり

ほつす　俗語すら穂と摘よりぬるやほづくもひて俗よ鈴字とよづく字  
書乃本末よづくべ

万葉集ノ末枝又最末枝ナニと書リほへ秀ナリツハ助語ナリ日本記ノ上支  
カツ

如一〇大工をとひよ辭よほづきけるとも最末の氣をもつて  
裏未だ暮す

ほつ歟 神武紀より磯輪上秀真國と云ふもつゝ休め字也

俗語りほくひつふてほくひよすとまなぶらん

高麗乃別種也高麗天智帝七年と滅び大祚榮自立して渤海郡王とす  
契丹阿保機渤海以攻て東丹府とせしへ我延長四年也事に遼史ナニモ云々  
より朝貢絶えず東丹國ハ本朝文粹ニヨアモ光仁乃宝龜三年嵯峨天皇の弘仁元  
年仁明天皇乃嘉祥二年清和天皇乃貞親十四年陽成天皇乃元慶廿年宇多帝

乃寛平六年醍醐帝乃延喜八年又七年も來朝セリ唐よ渤海郡とだの蝦夷乃河ノリ乃海と指ス○深見氏ハ其先ハ高氏投化シテ薩州ニ住ル其子長崎通事シテ高氏シテ渤海より出るシリテ深見と称す  
深見ハ深海乃ト

ほくま 俗云ほくま人すもひを覆頭人すも推古紀よ見えくる法頭の  
名もほく又釋氏引法燈とひふを顕字なり

ほくも丸太ホ 沂筒標繩乃今れ水繩すホ 舟乃帆柱と立ふよ筒とひ所  
あひて船と新造するよ此でホたる家作乃上棟ホ祝すホと之  
よしも是ホく繩とくり上ホ下ホすホちみすへとくふ堀川百首よ

とかう舟ほつとあやめせよ川ホ柳風ホ波よふ

ほく 船よよの航手ホす荷錆ホともよホ伊豫ホにいづらす手火松ホす  
火ホ手ホ乃ホたホ○幾内中國四國ホ腹ホとほくとくホ東國ホよホほく  
とくとくとほくとくホ乃詞あり古一腹黒ホ一ホよ同ホ○相模ホ

最ホ手ホとホけり倭名鉢ホとホ合ホとホ関也ホとくとく著聞集ホほく成ホ

も給うる乃とくみりまかうるて見えり又うほ物語よほんてしも  
そ○ほくえふとほくえふたえ反てすう馬子の馬と呼るよほくえ  
らとくふれせ意すう一物とよろくぬ時よ手鼓をくう車ともほくえふ

フ

ほくえ 風母とく火光の音すう白氏文集乃注よ颶母如虹也とぞく字典よ颶  
い験乃傷り颶ハ海中大風也とぞくと佛經よ風颶如虹とぞく新撰六帖

山乃くはくさを起の室乃浦よゆるひよりとあは舟人

○俗よ婦女の怒意りて氣きすかとほくえふとく颶母とく出づやがて  
波風たゞへきとくさくとく

ほくえ 程とすく道乃ほくえふ是すほくらひもくらひ友とく是

ほくえとく通す分限とく辞すう万葉集よ間とすくはほくえふ是  
すう○所字許字ばくうもほくえふとすく三年所十一年所二十許年三十許  
年かくえふとく○恰合しきとくとくとく六郎字の意也真字伊勢物  
語よ期字をすく曲禮乃博節代ほくえふとくも是すく注よ博ヘ哉

抑也とく日本紀よ二字並にあとふくとくより○源氏よ人のやくく  
ふへ入品の名也○俗よほく拍子とく程よ隨て拍子もくとく駄源抄よ  
神樂い和琴とく其程と正して拍子と打さうと見也○ほくえつづくと  
へくとく乃分劑相應とくより○神代紀よ陰とすく火戸の名前陰の氣  
乃發する所すくとくア古事紀よ陰上もすく御<sup>ホト</sup>陰井ハ大和高市郡吉田  
村とある○承久記武人ノ姓名よ女陰四郎ありシテナカニヤ○陰根<sup>クス</sup>ハ事  
とく神軀とせーと奥州よありて實方中將の故事よすく傳<sup>ト</sup>う又山城  
乃苦集滅道<sup>クダ</sup>ノも金勢神とてありシモ梵天土の陰根と神と<sup>ト</sup>事<sup>ト</sup>ハ事  
西域記よアヌス<sup>ス</sup>○土圍鬼ともうく蔓乃長<sup>ト</sup>に間ありシ茅子の如くを  
根多く連<sup>ト</sup>隨<sup>ト</sup>すて名くはる<sup>ト</sup>一飛<sup>ト</sup>岸<sup>ト</sup>てへみくらし遠江乃みくらみ  
岡ぐとお藤ぐとおまくもく○新撰字鏡よ石長生又瓦部根又葛と訓<sup>ト</sup>  
土革<sup>クス</sup>ハもすく倭名致よ茯苓<sup>マツリ</sup>まくほく訓<sup>ト</sup>土中よかく<sup>ト</sup>とくふとくふと  
○田舎よ窓<sup>ト</sup>のぼくろ萬葉集よ程すくろ<sup>ト</sup>助語すく珠雪乃ほくえ  
ほくえ よくのぼくろ萬葉集よ程すくろ<sup>ト</sup>助語すく珠雪乃ほくえ

くくゆうあけべとよめのほんくじくふ如く○ウシのほんくわ穂棘の  
ゑなる一信濃までほんくじく山家集よ

ちほんくに焼捨一野のさわぐらに折人かくてほんくとやする

ほんく 日本紀より正とよもろ新撰字鏡又瓶又瓶又壇代とよも火坛ホツキ乃若か  
る一倭名鉄より金とひらき俗よもほんくと注ざり尔雅より金謂之角カクとえす  
或ハ樂器ホクギとせん事倭漢同一○延喜式より酒曲平缶蓋水ス金叩カタマリ金スすくあり

ほんく 神代紀尔邊字とよも皇義紀尔偏又頭又傍字とよも上字とよも史記  
乃注よ邊側の云し乃そくほじ近ミ乃辭ハシマ伊勢物語よもとのほんくとよ  
ハ澤畔ハゼバンナリ次とよも俗語ハナシ乃らくとよも詞ナリ童蒙頌韻ウタヒとよも

ほんく 佛とよも浮屠家ハラタケノ音ナリ毎家作佛舍ハラタケ乃置佛像及經以禮拜供養す  
るハ天武天皇乃詔ナリ○黃面ハ碧巖錄ヒツヤムク又天竺人ハ繁色ナリヨリ通商考  
ユアヌクムル也佛とも繁磨黃金乃とどトドカラテ難陀加葉ハラタケノ半サ  
ヒ合す一箇と書ハ造了字也○ほんくのみハ日本記より佛像とよも○ほ  
んくのりハ日本紀より内典城ナリ○佛とよもくの灌佛會ハラタケナリ佛の力ハラタケハ

涅槃會ナリ○佛足跡ハ聖武帝の皇后光明子の作る所ナリて歌十七首碑碑文  
鶴ハク始山州山階寺サンケイジにて今南都ナニワノ藥師寺ヤクシキ存歟佛足跡乃事ハ西域記  
佛國記等ハタケ出ナリ○吉家乃佛貴ハラタケノ也俗諺あり砂石集ハラタケニ事實を載  
くハラタケ佛法象教ハラタケ刻木為佛以形像教以也事物異名又佛教の佛法像  
教の略名ハラタケ也

ほんく 解とよも總のとくあつた出たる詞ナリ一續古今集よりほんく

くくも尼えく遠州エチまでほんくとよも

ほんく 神代紀より熱又火熟ハラタケをよも古事記同一大乃折ハラタケナリ矣ナリ○枕草  
紙よもてく本もよもとほんくをう出たる事ハラタケ也ハラタケめと書はる恨ハラタケとよも  
とうけてさくら胸のほのほなるア

ほんく 獣又殆又危とよも幾ハラタケハ將及也と注一殆ハ訓近也と注一危ハ險也と注  
舊ハラタケほんくとよも源氏ハラタケもよもとよも邊ハラタケノキナキ拾遺集よ

宮造ハラタケひと乃たくとよもとほどくとよもと注よ伐木聲ハラタケノスとよもと萬葉集ハラタケよも

杜詩ハラタケ伐木丁ハラタケ一とほどくとよもと注よ伐木聲ハラタケノスとよもと萬葉集ハラタケよも

たと木こうほくくあくよくとのひとりきぬこもれう源氏ももすでん室もほと  
くちうこそとくまくゆらしもく意すうと生せり危殆よう轉せらるたう一又  
六帖なごよ程に乃意又轉用サふくわう

ほどごと 施とううこす反くほどくれば解散の意すう神代紀と播入布をも  
すう三代實錄よ親もすう又施とひくともすう〇古今集乃作者源忠と袋  
羊紙よほくわと訓せり

ほくわく 史記乃点本よ汲字とすう太極の点すう伊勢物語よく飯乃上  
よ泪落してほくわくより真名本よ潤字とすう新撰字鏡よ眸とほくこ  
訓サク脹なうとくと同名ナガシヤ〇水よほくばくじも同一

ほくぎん 杜鵑とくふ倭名抄よ鶴鶴又郭公と訓するハ誤ナク鶴鶴の鶴嘲  
郭公の鳴鳩ナクえどもよくちくく万葉集よ鷗公と書ク立夏之日未  
鳴必定とも鳴聲と別部頃宣壽とくすー十王經よスミモト鳥經ナリレ  
倭人乃作よ鶴ノレヒとく又歌よ名のむとよしも姓ナクとくとく常くよ時鳥と

書り文選よ時鳥多好音注よ時鳥春鳴之鳥くも又過時不熟と鳴よ  
袖中抄よススケテ本草よ田家候之以興農事とくひ歌よ程時不過くも  
る母よよ母う本草よ其聲哀切其鳴如日不如帰去とくとく鶴鵠の行  
不得とくとく歌ナリ〇歌人初音とくとくと喜ハ悲切ノ聲と愛感一  
て吟腸乃鼓吹とすばすう荆楚歲時記よ杜鵑初鳴先聞者生別離とくとく  
も蜀魄の意ナリ又登廁聞之不祥とくも人少俗忌のする所ナリ〇かく  
くの血よ鳴とくとく熟鳥ナロフムニ肉生れハ鳴くとく肉の生れて血乃出  
ふ故ナリ〇空乃量よ村雨ナカヨテ照る空よナカヨナキナリとく〇澤菴  
和尚の百首の中よ

老らく耳あくまくとほくまくサクシ歩きや初音すうう  
鳥丸光廣卿乃評初音乃うと僧正同日の論よ行すとぞくう〇聚樂和  
歌乃會よ長嘯子雨中時鳥と

雨よすく彷徨の游よ時鳥かれやくもくやれうん  
鷗齊云ナクとくとく一都乃會よ他國乃名所ばへよすくナリ

又佐斐の渡りよ時鳥とすらもあらずと○信州高遠の益次氏なる人キナ  
節木の中よほとまきひの死をかと得くう箱よ入置て翌年三月の末よかの  
箱と開きテよほとまきひ飛出て行方とくばざるへ秋より春まで  
の内へ朽木ナシの中よかく居るのみなるや又冥途の鳥ともいひまく一山蘇  
生すなどりてよもじりち歌よ

やく山乃朽木ヨリふほとまきひ夏と待てや音よへづく

○万葉集ニ鷺之生卯中霍公トタミテ今もたまくあるやく其ほとまき  
ハの子ハ飼びと久しく鷺のすとく霍公ハ巢城宮ヒト拙くて寫乃巣と借  
て卵を生すも鷺乃卵は杜鵑よ化すかあくとも本子も居他巣生子と  
スミテ○ゑこほとまきひ万葉集ヨアモ○後鳥羽院隱岐ノ國播遷ノ時ほ  
えみれ乃声と御ひとひあつて

チケハミクミケト都乃恋一ミコサガ里の山ほとまき

此後ハ鳴止ぬとく後ユ後醍醐帝モ播遷モ一法一て

聞人ハ今モナミカニカニ時鳥誰とくもとがゆみこと

是よりハ又すくとらひ傳テ○揚用脩シ諺語ニ商陸子熟杜鵑不哭トアモ○  
出羽にて尾搘くあやとく山艸ノ名ニモレテ小繁花班文杜鵑羽よ似テ  
ととて名く葉ニ点あふと山ほとまきひとく三黒艸ナリトモ黄花乃  
とみあ

ほとまきひ 日本紀ニ附庸トヨウ詩の朱注ニ猶属城也トタモ禮記ニ說約  
ニ影國トモシテスミテほとまきひをなす一ほとまきひ邊裔乃義カ  
ハシハ幽遠ノ義す

ほとまき 浪穗乃倒詔ナリ稻穗乃浪乃如字とらア

ほとまき 詩句乃耐耐ニ叢林トヨムホムナリトシモ雪音のほんなんの轉訛  
セシナキリ字召モ耐ハ恐ナリトシテトシモ伏らシナリハ奈モ頗奈シ  
同トモア亘ハ可乃対テ可字伐左文字ニカミナリナリトモ不可  
訓ハシハ

ほとまき 晴蛉日記ニシテ益乃音ニボシトモナリ雲國故ニ内藏寮井儀御  
金供ニシテ其益祭ニ生靈棚ト称一僧乃讀經と相經ニモテ○中國ニ

イ 言 手 ト テ リ

凡手盃とほよとひす

やよぐる 穂よりあるへ良の於よ色よあくらむ意よらす皆稻薄葦荻ふとよ寄  
うかよそのとよう秋の田せわにこう人をあざめの類也伊勢物語力不よ  
うでと真名本よ穂字派す○帆よ出るをとあつ伊勢集よ行船の下よ出て  
とえすう○万葉集よ

火渡せあすれ浦よとほ火のよとよ出ぬ村よまく  
くよる火の穂とひける也

△ はぬ

△ ほね 骨とよう火根り骨かくもひ○扇乃骨西土乃称も同一又橋もよう  
鞍よと橋とひす○文明のはよ骨皮とよ姓あり○骨嶋ハ備前水みの靈異記  
よえゆ

△ ほのくろ 无名抄よやひる(きぬくし)又骨張(音よの)是成(一)

△ ほのくろ 林羅山乃説よ本朝俗語謂勞曰骨折(ひづき)とひづきと漢書李固傳  
よ海之折骨とぞえ梵綱經よ剥皮爲紙刺血爲墨折骨爲筆書寫佛戒西域記

よ於是折骨呑寫經典(アスヒテ)新撰六帖

△ ほのくろ 我物故よ骨折(ひづき)俗諺(ハ衣食住)勞もる成(一)

△ ほのくろ 万葉集よ髪髪(ハ)又彷彿(ハ)又不明又齋字派す新撰字鏡(ハ)佛(ハ)とよう  
火のまの骨(ハ)新古今集の辞(ハ)行あくする(ハ)のう(ハ)のう(ハ)のう(ハ)のう(ハ)  
意(ハ)○風(ハ)閑(ハ)側(ハ)閑(ハ)か(ハ)の(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)  
伊勢物語(ハ)入(ハ)風(ハ)所(ハ)道(ハ)とよ(ハ)か(ハ)の(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)とよ(ハ)  
皆(ハ)の(ハ)暗(ハ)也

ほのほ

神代紀よ火(ハ)燄(ハ)又焰(ハ)とよう坐(ハ)も同(ハ)火(ハ)穗(ハ)とよう日本紀皇子

名よ火(ハ)穗(ハ)と書(ハ)一説よ火(ハ)乃(ハ)と書(ハ)と火(ハ)尾(ハ)とよう

ほのほ

和名抄よ窠(ハ)と訓(ハ)鳴(ハ)乃(ハ)と書(ハ)と火(ハ)尾(ハ)とよう

轉(ハ)とよう凡(ハ)神(ハ)瓈(ハ)神(ハ)器(ハ)多く窠(ハ)乃(ハ)紋(ハ)とようも武(ハ)器(ハ)意(ハ)とよう

○太刀(ハ)柄(ハ)頭(ハ)鳥(ハ)窠(ハ)乃(ハ)銛(ハ)とつけたる(ハ)鳳凰(ハ)窠(ハ)より出(ハ)る体(ハ)とよう

ほ乃く  
ほ乃くよ明る良なり○人麻呂乃ほのくれ詠ハ晋謝靈運う詩也  
中流袂就判歎去情不忍顧望脰未惜汀曲舟已墮トシテ意在モアト○此歌  
古今集旅乃部ノ入テ是く旅乃意ナリ又哀傷部ノ入テ是く奇ノアモウモウ

万葉集よ髣髴とほの髣髴の彷彿と同一〇ほりめうれいかむ  
及くすり〇管万葉よ髣髴とほのとほのうるうほのよゑえととも續古今より

△やう△  
倭名抄よ鱣をすみう魚膘也と注く膘の脇前也ともへやそ腹の筋引る  
丁童蒙頌韻よ腴とすう

利名抄ノ船櫓をすゝ新程宇鉄之櫓ノ事也。折也同。三夷通の如  
上染帆柱也と云少

楊弓の的を施す者と呼マ又ジハシトシテ大射禮ニ一名容似今云屏風  
以牛革鞞漆<sup>イナフス</sup>之とアズミ内裡式<sup>ノハ</sup>設<sup>シ</sup>射席<sup>シテ</sup>以熊皮布<sup>ス</sup>とアズ

新撰字鏡ノ拘をよみ又かひとよみ又北斗星斗柄也と注せり  
和名鉄より署字をよみ新撰字鏡ノ剔字とよみ又剗をよみ空物腸

下〇元龟二年九月十二日平信長署延暦寺天正十年六月廿六日菅原利家署

日本紀和名抄よ嘸とほくとよあるもの矣すら

ほくゑむ 遊仙窟よ斂咲又呑咲とよめり頬笑乃美ナリ——花ハ敵よ  
ゆも同——源氏<sub>二</sub>ほくゑむ<sub>一</sub>花之采花物詰よ閑白<sub>一</sub>のうちほくゑ

ませたまゝとさうも同不ぢう

ほくちゆ  
喧アキ張タリの手字書ニと窓ルの口滿食ルと見えまく

ほくだち 和名鉄より根とほこたちとより梓の如く立木すれと名とせ  
る今方立と書へ暗推り誤たりとひア○平家物語より  
又え雅亮技よ車ほくだてとも見えたり○俗よ竹ふみく三本よせて結  
かくめ足と開き物と掛けとほくどもともちくたちともひア

△やまし  
とよみう  
譽をよみうやあらしのそめら反ま生又まれ反め也日本紙よ善く

日本紀よ踏石をよみくみとよみく八雲御取入へ  
むとえり

△ も 神代紀よ褒美とより秀と木の詞より譽も同

ほりふともひめもとよしも也讃と同

本暗記也と云ふを古摸印乃法なく昏寫と専らとするとして其草  
創乃本旨とするべし名なる。正本ハ北史より元中箱本よりハ小本  
と云ふ。○大内義隆紙と明朝工渡にて書籍とする此山口本と  
云ふ又大内本と云ふ又朱氏新註五經と求むる。○印本よ鬼形乃者と  
朱墨捺<sup>カス</sup>ハ魁精踢斗と云ふ星乃す。○北斗乃魁星<sup>クイ</sup>の文章と司る  
と云ふようだ。○源氏はほくよとくらふい手本と云ふ。○口  
詣よひとも本の字をもつて豊後とそいあつてもとくらふい。○式正乃膳よ何本  
立ともあらう類聚雜要より云ふ。

やむけ 穂の秋の田んじけの風花薄やむけの糸萩のやむけのさよ  
ふともう

神代紀ノソソノシ  
1  
紫式ア日記より  
ほんと  
ごく古事記が  
古事記の下に

えもる如く四道の類れく乃本職とて今とも醫流より科女科  
外科より對し内科と本道とし薩戒記と和氣丹波之一流謂之本道と  
名ふ良富記とも本道の部よりうらへて本草もえり後土御門朝文明  
五年に信州釋良に明入明人より語りて曰我國二百年前有兩名医一為和介  
氏一為丹波氏といふ事神應經よそそく庭訓より當道名医とす○西  
土と本道としむへ本分の道理を指す○承暦四年高麗王求名醫丹波雅忠乃  
本百練松とす

わんがく 稽總子をふ耳が熱つとの也毛とく造る○燈火のふり茶爐の  
サシヒムハトテ是比雪洞とて茶疏と生ぐ

△わろく 全浙兵制の熟冰譯やう又吸磁をやめふると  
火あくの新撰字鏡の湯又滅がく俱よさかくと訓せり不同

△やと

△ほや 歌と信濃するほやのすきれとくは德屋たり諏訪ノ明神ノ御射山  
茅より長官立官領家等乃造ふ假屋ぢりとらう今小縣即ち德屋の地名す

菟寧郡松本の東諏方郡御射山神戸乃東とよほや野あり立諏方乃國と  
称すとひ諸郡とたまうたふたる丁續古今集の野麻

赤寒なるほや乃薄の秋風よもよきて廉も妻卯とす

○七月廿三日乃祭十九とす時候よりひがく故り今ハ青葷とぞと  
実ハサシ所ありとて○火屋とひの香爐圓爐ナリは蔽ふ物  
金銀銅とて造りととまく御射山の神事乃行宮よ象くともとて○  
倭名抄よ寄生と訓せり今も美濃信濃にてへあらす万葉集より保  
與と云ふ諸木よう花鳥餘情よ塞數ともよし石葷よ似くる小艸す  
とらすハ別物す○上野よ紫とて倭名抄よ老海鼠とも訓す延喜式  
ア海產錄よ朱嘒とぞとて今章タヨウ奥枕よ似て色赤く大をたる物と  
一貽の貝の鮨也延喜主計式よ貽貝保夜交鮨とぞと李吟へ交とつま  
とくす麺のつは吸とつまなとひ意とや又立雜俎よ海鼠一名海男  
子其狀如男子勢然淡菜之對也とぞ余皇日疏よ文嗜似女陰とも名

嗜も淡菜たりいづひとく又東海婦人名あり海錯錄より誰謂之東海婦人耶當謂西施不潔とらつまれハ陰陽乃形ニ似るとして妻モハ戲斗ムナリテ○多識編トヨシ石脚とすり○蝦夷にて數乃子とすり○相馬百官より梅干とすりハアホーの赤と白と色の赤そり老海鼠ニ似る故ナリ

ほやけ 日本記より失火トトメリ三代實錄より淳和院乃失火之穢トヨシ儀式帳より入火燒トスミ國津罪乃内トアリシズモ吹拂トスモ或ハ吹綸モヤ○類火と延焚トス

ほや 和名鉄より犬よ吠トヨシ牛よ吼トヨシ狼よ嗥トヨシ乃類ナリ

ほよ 寄生乃ほやと同モトモヤ万葉集より

ほら 洞トトメリホラナクナムナ新撰字鏡より洞又晴嶠トトメリ章事記より内ハ富良ニシテスモ○ほら乃シハ盡之大者南蛮國吹之節樂トスモ又法螺トモ寶螺トモアヌ武備要略トモ呼囉ト書リ是中古トヨリ軍器

用あくふとくちう宋東南夷傳より林邑國人吹海螺為角トスミ武備考より吹海螺為嘶トスミトスモ葛城山乃高嶺トヨリ狩童トスホト音ナリ又梵貝トモ称セリ本艸より梭尾螺形如梭今教子所吹者トスモ是ナリ貿恩經トモ軍ト貝ト吹本足ミ千手經ト一切諸天善神ト招ミ呼人トハ宝螺ト手ナシトスモアヌ木集より

山伏ノ腰ナツケルホレ貝ふくふとすれ秋秋乃月

○宝螺乃出乎水ハ明應八年六月大風雨ノ夜遠州ニ此事ナリテ濱名乃湖と乃間乃陸地ナリ入海トナリ此類諸國ニトヨリ龍乃出るも同モニ屋久立雜雜ニ閨中不時暴雨山水驟發漂没室廬土人謂之出蛟理或有之大丸蛟蜃藏山穴中歲久变化必挾風雨以出或成龍或入海トスモアリ洞貝餅ト名ナリ○保良宮ハ近江より續紀より甲賀郡敷使村也今蠶洞ト呼又邂逅洞ト呼リ○鐵物トモアリ○琉球トと民間の炊爨ト多く螺殻ト用ヒトスモア

△ほり

堀或いは堀かよもりうの名也隍ちかほりす〇京乃郷ほりほり

サモシ一時よ政山公三都乃迎るよ堀ちほりぬとめからと仰らる

○堀口乃姓太平記より〇城のほりと蝦夷よハシミヒシフ〇まよほりと

シキ田中の小仲なり

ほり

万葉集よとほりす是ナシと欲字をよもり今ほりすも

字書よ食也願也と注せり

ほりき

倭名鉢一漸とよより堀池乃名ナリ又掘柵乃名ナリ今テノ城

乃ほりすり埃裏抄よハ柳ともより

ほりく

歎ナリ歎識トウル時も識是挺出者とアシテおもひナリ又廣

識スルモノ

ほりかす

新撰字鏡よ蘇どよもり承以鼻発土也と注せり

△かろ

堀をより〇穿かヒ開キヒトヨリ日本紀よ開キヒトヨリ皆通ア〇

日本紀の歌よ欲とほりとよもほりす也アモミヌ〇俗よものと投ヤム半江は

るもほりすも同

△ほり

心乃ほりは呪字乃楚辭乃注よ呪ハ失意也ヒテキスロ呪物也同

一老と老よほりくらひ色ニ潤シカモほりくらほりも同

○ほり

すり媚藥ナリ〇ほりくしくナムモモモ

△ほり

三代實錄よ保侶衣ヒテ難薄助以保ヒテヒテ字乃如ナリ

東鑑よ母廬ヒテ吉國乃制ナリ一ふくろ乃略訓ナリ久已貴命袋ヒ

たまふすり起ナリヒテ又ほりと通ア洞衣乃名ナリ一説よ鳥乃ほり

ヒテ出アモヒテ下字集ヒテ縁ヒテ字乃名ナリ一説ヒテ疑りくハ似

シヒテほりの木ハ檜ヒ似てナシ葉乃木なるものをナリ〇万葉集ヒテ天雲ヒ

シヒテほりの木ハ檜ヒ似てナシ葉乃木なるものをナリ〇万葉集ヒテ天雲ヒ

△ほり

職人歌合ヒ暮露ヒテ歎ナヒテ文字の玄ヒテナムヒテシモモ

徒然草ヒテナムヒテヒテの背ヒテナムヒテ近世ヒ梵論字梵字漢字ヒ

ヒテヒテ者ヒテ始ナリヒテカヤヒテスルヒ梵論の字ヒテ梵志ヒテ書

△ほり

職人歌合ヒ暮露ヒテ歎ナヒテ文字の玄ヒテナムヒテシモモ

今之金剛也。一説云此より左と右へ急ち空中より走るやけくふとのこと。  
主として上総國鳴戸村願成寺より手斧やろともふ物ありて夜やる大きな形狀にて手  
柄の如くして虫鳥ふとのやうにあたふといふ

ほろと 鳥乃兩翼乃下よりて透間を補ふ毛すれを保侶羽乃矢も○鷹は  
ろくらふへよろひもよむしてひて背のふくらみたるとほくつかうくらうとほろ  
ゆひのもともとくらう

ほろと 倭名鉗よ風瘡勝とかさばくと訓せりほろとへ瘡字は轉音かく通雅  
よ今俗通以觸熱膚生細疹曰瘡子と見えく○倭名故よ程ともあり碓程な  
まと注せり今ノロトモほろとくもほくとぎともいふ碓权也碓程ハミとな  
リ○古歌よ大井川よよゑほろとへ今より上戸雪下紅葉やくらうと  
新撰字鏡よ白英とほろと草と訓せり

古訓をもとより民も同一威儀同一  
古今集よからぬことをよくとる

雜文詞也

知るべく草の匂に迷ひおもひを失ふ  
○けくとやろくとく諺の雉子のすよせきく権を減ざるをとせるゆうア  
やくとく 源氏よやろくと落こく木の葉れ露玉葉集よ山鳥のやろくと  
鳴聲よけいとくえく○晴蛉日記よやろくとちふくとくひ砂石集よ  
あわらくあまくとくえく梵呑よ発露游泣とくよゑよや清輔  
旅はよもかるかをくひやろくと泪うら涙の都とく

源氏より退出の体」より一枚よしのふとせり  
穂綿たう蘆乃ほりとをとて

やをうち 東鑑ノ小童部諍論打合乃下保惠打者如大泡丁刀物也と云ふ  
まほ名へほすゑ乃答へる

倭姬世記ノクノアモル今吉摩國伊難官ニ坐ニ神祇百道ノ

度會元長

秋乃田乃穗落乃神乃古乃サリハ久乃鷦乃万代

鷦乃神乃ヨリハ岳陽風土記ノアモル岳州ノ免ノリテ神ノバ陵ノ雉

ノリテ神ノアモル

倭訓釋前編二十八終



